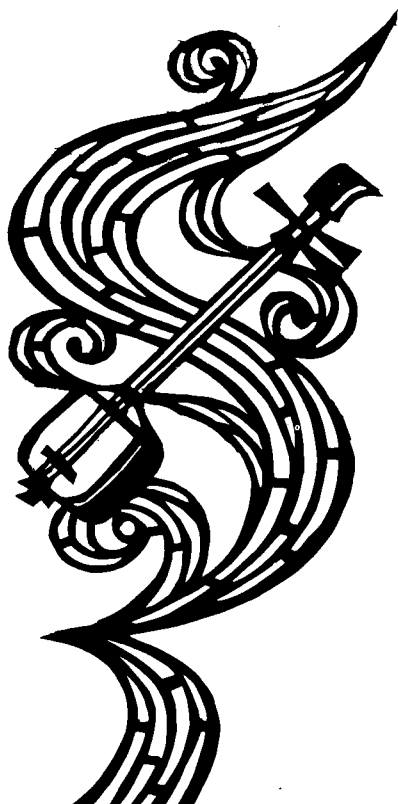


車の火
和田芳恵



講談社

火 の 車

第1刷発行 昭和46年3月20日

定価 620 円

著 者 和田芳恵

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京3930

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。 © 1971 和田芳恵

0093-148913-2253 (0) (文2)

目次

狂い咲き

5

螢とぶ肌

45

そんな形で

71

あの人

87

逢いびき

107

ひなどり弁天

127

寝くたびれ

145

火の車

163

あとがき

229

装
幀

川
田

幹

火

の

車

狂
い
咲
き

今は、上狩野村と中狩野村を併せて、天城湯ヶ島町になったが、昭和二十三年、数えの二十七になった私は、上狩野村役場に出はいりして、人口調査の手伝いをしていた。

「博司、また、伊東から流れ者がひとり来て、喜久屋に間借りしたそうだ」

遠縁の青木村長にいわれた私は、つい十日ほど前に、喜久屋の二階で、水野いそ子という女の身許調査をしてきたばかりであった。

「この土地で芸者屋をはじめようと思うのですが、いかがなものでしょう」

いそ子は、職業的な笑いをおしろいやけた顔にうかべて、調査表に必要事項を書きこんでいる私に聞いた。数えの三十五にしては落ちついている感じだった。

お茶をすすめる手の薬指の付け根に、大きな撥だこを見つけた私は、いそ子は長いあいだ芸で身をたててきた人とは思ったが、芸者屋を一軒持つだけの資力があるうとは考えられなかった。荷物はあとから着くとも言った。しかし、見まわした部屋は殺風景で、床の間にたてかけた三味線の覆いが、わずかになまめいた色彩になっていた。

「湯ヶ島も、ぼつぼつ客足が殖えてきましたから……」

私はさりげなく答えて、やがて、いそ子が皺におしろいをめりこませて、大年増らしい座敷勤めはするだろうと踏んだ。

私は、大正十一年生まれ、湯ヶ島小学校から沼津中学を経て浜松高等工業にはいった。戦争の

ため、卒業が半年繰りあげになって、すぐに川崎の昭和電線電纜でんらんに就職した。ここは軍需工業地帯だから、本土爆撃も近いと聞いて、どうせ、死ぬなら、どこで死ぬも同じだと海軍の予備学生を志願した。少尉に任官、予科練の教官と偵察員を兼ねて、内地の海軍航空基地を転々としたが、舞鶴で敗戦を迎えたとき私は中尉だった。

敵の本土空襲がはげしくなり、戦局が末期的な様相を帯びるにつれて、軍紀も乱脈をきわめるようになったが、基地では酒色が士気を鼓舞するという理由で、前から奨励しょうれいされていた。しかし、これには、ただ、ひとつの制限があつて、ホワイトには手を出さずにブラックを相手にすることになっていた。ホワイトはしろうと女、ブラックは芸者、娼妓しょうぎのたぐいを指す隠語である。そして、昨夜は、敵艦をいくつ轟沈したなどと手柄話にする者もいた。

私ははじめて女を知ったのは、少尉に任官した昭和十九年、数えて二十三歳のことである。相手は待合「幾夜」のおかみで、四十七歳であつた。その日、執務中に酒をのんでいた分隊士の私は、

「少尉の襟章をつけて恥かしいと思わんか」

と、分隊長からはげしく叱責ししきされた。

海軍の分隊は二百五十名で構成されており、分隊長は大尉もしくは中尉、その補佐役の分隊長は二名ほどで、少尉か兵曹長が当っていた。

非は、もちろん、私にあるのだから、あやまれば済む気心の知れた直上の分隊長なのに、虫のいどころがわるかったのだらう、私は言われるままにいきなり軍服をぬいだ。

「これはおもしろい」

と、挑戦的に次の命令を待ちながら、私は、自分の顔からずっと血のひいてゆくを感じた。

私は意地になっていた。

職業軍人は、予備学生あがりの将校や、まだ、おさな顔の消えない予科練出身者を駆りあつめては、死の爆撃行へ追いたて、自分たちは、できるだけ身の安全をはかっていたから、眼に見えない反目になっていたのが、つい火をふいた感じだった。

通りがかりの上官が間にたつて、うまく裁いたから、その場は一応おさまったが、私の同僚たちは、自分に代つて、日頃の鬱憤をはらしてくれたと喜び、勢いにのつて、なじみの待合「幾夜」へ繰りだすことになった。

酒五本、それにブラックを抱いて三十五円が当時の相場だった。少尉は月収二百円にはなつたから、遊ぶには充分だった。私たち予備学生出身は職業軍人にくらべると、まだ、女関係は潔癖であった。

その夜も更けて、めずらしく雪になった。仲間は、それぞれ自分の女といっしょに部屋へ引きあげたが、私は、いつものように帰隊することにした。愛人の遠山澄子ができて、私は身を慎んでいた。澄子は勤労働員で青山学院から下丸子の北辰電氣に採られ、ジャイロをつくっていた。

私が指導に横須賀から北辰電氣に行くと、日の丸の鉢巻をした遠山澄子がいた。澄子は同じ土地の遠山医院の娘であった。

思わぬところで、私にあった澄子は、急な親しみを示した。遠山医師は、湯ヶ島小学校の校医を兼ねていたが、厳格な家庭だったので、四つ年上の私は、それまで澄子と親しく口をきいたこともなかった。

私が、澄子に岩波文庫の「桜の園」を贈つてから、読後感を述べた札手紙がきて、ふたりのあいだに文通がはじまったが、空襲の危険にさらされた愛人同士に、あすのいのちの保証さえな

った。

「わたし、いろんなことで聞いて戴きたいことがありますの。お逢いください」

と、ある日、澄子に言われた。私には、軍人という特権があったから、澄子を寄宿舎から誘いだすこともできた。ただ、それまで、しなかったまでのことである。

澄子の疲れた顔におもいつめたものを感じとった私は、

「いいですとも、いつにしようかな」

と、澄子のいうように、六月十五日に決めた。私にも、手紙ではなく、自分の口で愛をたしかめたい気持があった。それなのに、私は、その日、禁足命令がでて、澄子を訪ねることができなかった。米軍のサイパン上陸作戦が決行されたからである。私は、それからは、自分が清潔に生きることで、澄子の愛の持続を願うより仕方がないと考えるようになっていた。

玄関へ私を送りだした「幾夜」のおかみは、

「まあ、ひどい雪ですこと」

蛇の目の傘をいっしょに差しかけながら、門のところまでついてきた。

「将校さんには、心から好きな人がいるのね。でなかったら、ひとりで帰るなど、できるはずはございませんもの。その人のお顔が見たいわ」

私は黙っていた。うれしがらせば商売女のつねであった。同じ傘のなかの、きつい日本髪の匂いが、私を息ぐるしくした。

あらかた道も消えた白い大地が、ふたりの視界に茫漠とひろがっていた。

「わたしの部屋でおやすみなさいな。朝早く、きつと起してあげますから」

傘の色に染まって、青く澄みわたったおかみの顔が、のんのん降ってくる雪空をぼんやり眺め

ている。私は、ふと母の喜代を思い浮かべた。分隊長に楯突いたのちの気のゆるみが、私を感傷的にしたのかもしれない。

私の母は、湯ヶ島温泉の西平^{にしひら}で、妹の晴子を相手に煙草や雑貨をあきなり登喜和屋という店をひらいて、侘^{わび}しく留守をまもっていた。大倉組に勤めていた父の憤一は、昭和六年に死んだ。長男良雄の九つを頭に、次男の私と妹の三人を擁^{かか}えた母の苦闘が、その日からはじまった。やっと育てあげた良雄は、長い療養生活のあげく死んだから、私が生きる力になっていた。私は、遠くの雪ににじんだ灯を透^{すか}すように眺めながら、やわらかな山ひだの多い冬の伊豆をなつかしく心に描いた。

「はっ、泊めてもらいます」

と、私は口にして、母に対するときの素直な響きになっていた。

私がはずした短剣を、床の間の飾りにして、

「主人はマージャン気違いなんです。きつと、今夜も、また、帰らないでしょうよ」

おかみは、投げやりに言った。長火鉢の銅壺^{どうこ}に銚子を入れたり、また、自分がおっていた上っぱりを、私のうしろから、そっと掛けてくれたりした。

私は、ぐっすりと寝込んだらしく、喉のかわきで眼をさました。傍^{かたわら}におかみが添寝していた。

「何時だ」

私は闇のなかで訊ねた。

「そうね、いま、四時を少しまわったところよ」

腕時計の夜光の文字盤を、私の眼先に突きつけながら、おかみの、ぼってりした脚がからんできた。まんじりともせず、それまで眼をさましていた明晰^{めいせき}さが、落ちついたおかみの甘い声にこ

もっていた。

酔いしれた私の体から、いつの間にか軍服がはぎとられて、動きは自由だった。おかみが枕もとのコップについてくれた水を、私は音をたてて飲んだ。熱燗あつくあんのコップ酒をたてつづけにあおった記憶は、かすかに尾をひいていたが、寢床へ運びこまれた覚えは、少しもなかった。それにしても、この小ぶとりのおかみの、どこに、そんな力がひそんでいたのだろうかと、私は思いながら、おかみの二の腕を握りしめた。私の体重は当時十六貫を越えていた。

やがて、私は、小さい頃、母にしたように、おかみの胸のやわらかさを手に捉えて甘えていた。帯をつけたままなのに、胸もととはゆっくりとくつろいでいた。おかみの、幾度か、なまつぶをのみこむようにした白い喉の動きに、私は酒くさい唇を持っていた。

「しよりのない駄々っ子ね」

おかみのあたたかい腕に力がこもり、私を抱きあげながら、脚は自然にひらいていった。

おかみは、私のそこへ手もそえず、私にも、おかみのそこへ指も触れさせなかったのに、熟れたアンズに食いつくときの音をたてて、おかみの体内へ呑みこまれてしまった。私は、あつという間に轟沈きようしんされていた。轟沈きようしんしたという言葉は、それまで仲間から、いやになるほど聞かされてきたが、私は男に飢えていたおかみから轟沈きようしんされたからなのだろうか、人妻をおかしたという罪の意識はなかった。私がおかみから降りるとき、黙もくって夕陽をみているモンペ姿の澄子をあざやかに思い出し、これで、自分の青春は終わったのだと遺瀨やうせない気持になった。しかし、これが最後の抵抗と考えられるように、それからはおかみに誘導ようどうされて、私はいろんな愛技を身につけていった。

私は、敗戦までに内地の基地をあわただしく飛びまわったが、その間になじんだブラックは二

百人をはるかに越えていた。ふとした折に、私は、それらの女たちを思い出すことがある。あらかたの記憶は、ばらばらに散っていて、女の姿態のかけらが、性欲的にひくひく動いているのであった。

この中で、はっきりと印象づけられているのは、私が童貞をうしなった、芸者あがりの「幾夜」のおかみと、横浜の磯子にあった偕楽園で知った半玉だけである。それなのに、どうしても、私はふたりの名を思いだすことができない。この妓は、鼻がわるいらしく、いつも、少し口をあけて眠っていた。

「十四なんです」

若鶏わかどりのように、まだ肉ののらない妓は、最初の夜、苦痛に耐えた固い身のこなしのなかで答えた。ゆれるたびにきらりと光る簪かんざしのひらひらを眺めながら、私はその妓の細い首筋を抱いた。

偕楽園は、将官旗をつけた自動車自動車が、ずらりと並んでいる高級な遊び場で、私のような尉官級の手にあわないところであった。それなのに、どうやら遊ぶことができたのは、仲居に、貰ったばかりの月給袋を、そのまま渡したからであった。

私は頭のなかで、性的に完全な魅力あるひとりの女体をつくりあげることができる。それは私が知ったブラックの好ましい部分をかきあつめたもので、この世には存在しない観念のかたまりである。私が、この女体の組みたてをはじめると、決して戦闘機の爆音が耳鳴りのように聞えて、不安にかりたてるのであった。戦時下に育った私は、いつも死を考えることができたけれども、生を思うことはなかった。

あすが、いや、今がわからない基地でのブラックとの接触は、剝削さつ的な事務処理に見えるが、相手から自分が生きている確証を受けとる営みと思われた。清純な時期を暗い戦争に投げこま

れ、そこで、むりやりに大人にされた傷痕は、私の心にはりついて、生涯離れがたいものになつてしまったようである。

水野いそ子の撥だこにすぐ気づくことができたのは、私が基地で多くの芸者を知ったせい、あまい放蕩の果てではなかった。

GHQの指令で、政治犯三千名が釈放されたのは昭和二十年十月十日のことであった。第一騎兵師団が代々木に進駐してきて二日目の九月八日の午後、米軍将校が武装兵と通訳を連れて、なんの予告もなく警視庁へあらわれた。特高部長上村健太郎の部屋へはいるなり、

「秘密室に案内せよ」

と、せまった。上村が、

「秘密の部屋などはない」

と、突っぱねると、

「政治犯はどこに収容しているか」

と、きびしく訊問する。

「彼等は、いま刑務所にいる」

と、上村は答えたが、まだ、疑いが解けぬらしく部屋ごとに封印して引きあげた。特高部をドイツのゲシュタポのような暗黒政治の本部と見て、探索に來たのであった。

内務省では、特高部を公安部に変えて存続させようとはかったが、十月四日の夕方、「GHQから、なにか重大な命令が出そうだ」という情報があった。その夜、内務大臣の山崎巖と警保局

長の橋本政実が、官邸に書記官長の緒方竹虎を訪ねると、果して、重大指令が出ていた。それは、思想警察の全廃、内務大臣以下首脳部の罷免、政治犯人の釈放、治安維持法の撤廃、天皇制批判の自由であった。翌五日に、東久邇内閣は総辞職し、ついで九日、幣原内閣が成立、その手で思想犯が釈放されたのであった。

その頃、敗戦処理の事務に残されて舞鶴にいた私は丹後の宮津の公会堂で、労農派の太田典礼の出獄演説を聞くことができた。

それまで軍国日本の軌道にそった教育を受け、それになんの疑いもなく海軍生活にはいった私には、別の世界を見る驚きであった。苦しんでいる多くの民衆のために闘い、そのため投獄された太田典礼の、身うちから照らし出されたような明るい表情は、虚脱感にあえいでいる私の救いになった。これをきっかけに私は日本共産党へ入党した。

湯ヶ島温泉の西平に帰った私は、湯ヶ島地区の細胞のキャップになり、勢力的に党員の獲得につとめた。伊豆は保守勢力の強い地盤だが、修善寺から以南で、湯ヶ島の共産党が最も有力な地点と見られた時期があった。

神山茂夫を迎えて、湯ヶ島小学校の講堂で講演会を持とうと計画した私は、青木村長に挨拶に行った。

「理窟では博司に歯もたたないが、ともかく、この講演会は中止にしてくれ」

と、青木村長はきつく反対した。私と遠縁にあたる青木は、政治家というよりは事務家肌で事なかれ主義だった。ついに親族会議をひらき、私の後見役を買って出た。自由勤めの形で、人口調査にあたっていたのは、そのためである。

私は村長の顔をたてて、神山茂夫を呼ぶことはやめたが、ひそかに農民や商人に働きかけるに